

# 特別対談 ー 所長交友記 ー

～丸谷先生と「人を指導するコツ」について語る～

2017 夏

今回は、丸谷明夫先生にお越しいただきました。丸谷先生は、知る人ぞ知る、大阪府立淀川工科高等学校名誉教諭・吹奏楽部顧問でいらっしゃいますが、一般社団法人全日本吹奏楽連盟理事長でもあられ、その他にも、大阪音楽大学客員教授もされるなど、極めて多忙な日々を過ごされています。たくさんのお話をお聞かせいただきましたが、今回はその一部をご紹介します。



所長村上（以下 M）：丸谷先生、本日は、そのように大変ご多忙な中、お越しいただきありがとうございます。

まず、先生が顧問をされている淀川の吹奏楽部のことを教えていただけますか。

丸谷先生（以下 丸）：はい、淀工自体は今年で創立80周年かな。吹奏楽部は創部59年で、私が顧問に就任したのが昭和39年やし、50年以上顧問をしていることになるなあ。私が顧問をしたころは吹奏楽部の部員は7人くらいおったかな。

M：50年以上ですか。私は昭和46年生まれです。私が生まれる前から先生は顧問をされてるんですね。

丸：昭和46年、すると、1970年・・・？1971年？万博なくなる年？ええ～若いなあ。

M：恐れ入ります。まだまだ小僧で、先生からみたら小僧すぎてちょっと恐縮です。

丸：せやけど、弁護士は、40は超えてる方がいいよな？

M：たしかに、やはり人生経験やキャリアある方がいいかもしれません。これから70歳くらいまではバリバリやりたいと思っています。

丸：指揮者は70歳から、みたいやで。とある先生がおっしゃっていましたわ。

M：そうですか！じゃあ、先生にはまだまだがんばっていただいて、全国最多の29回金賞獲得記録を更新されることを楽しみにしております。

<< 所長村上の印象について >>

丸：やっぱり頼れる人。ごっつい、まず第一印象は、ああ、これは頼りがいのある人やな。本当にこういう人が会合に参加してくれて有難いなあと思っ

M：当時のことは私も覚えています。丸谷先生が、「村上先生、費用とかどうなってるんですか？」みたいなこと質問されて、私は「いや、お金とかもらってないです。状況をお伺いして、自分の理念で、ポリシーでやりたいと思いましたので、それでやってます」とお答えし、丸谷先生に共感していただき、それ以来のお付き合いですね。

丸：そういう、村上さんの心意気ちゅうんか、そういうのんがあって、それ以来ですね。

M：丸谷先生と私は、立場は違うんですけども、先生の吹奏楽に対する意識はプロ中のプロで、そういった意識に共感するところがありました。その後、確か、偶然、お食事もお一緒させていただきましたね。

丸：うん、別に合わなくても、偶然、同じ店で飲んで。たまたま会う機会があったね。

<< その後の交友について >>

丸：なんか、色々あったら、相談に来させてもらってます。

M：私の方は、吹奏楽部の演奏会鑑賞させていただいています。

丸：そう、演奏会にも来てもらったりしてますね。





もう色んな（交流している）人いてるからね。

M: いつもありがとうございます。

丸: もうほんまに年配の方が多くなりましたけどね、演奏会。せやから曲も、1970年代くらいに流行った曲が喜ばれるねん。

M: なるほどお。

丸: (年齢関係なく) 共通が「カーペンターズ」や「故郷(ふるさと)」。これはほんまに小さい子どもからお年寄りまでいけるね。故郷(ふるさと)は、一緒に歌ってもらったり、そんなんやってますねん。

M: あと丸谷先生、うちがビルの7階から5階に移転したときに、お花をいただきました。その節は大変お世話になりました。

丸: いやいや、当たり前やないか。

M: その時の写真は私の Facebook にはまだ残っていますよ。(前頁の写真)

丸: 大変な仕事やってはるんやから、これくらいはねえ、させてもらわんと。

M: あと、先生が金賞獲得を目指して、若い世代である生徒さんの指導で、気を付けておられることや何かコツ等あるのでしょうか?

丸: ええ質問ですわ。2, 3年やってトップ取るというのは、簡単ではないけれども、まあ、努力があればできんことではないですけどね。続けるというのはやっぱり厳しいですね。残酷な法則ってのがありますよね、上ったものは落ちるといふ、これはもう当たり前のことやけど。せやから、それを常にこう、保ち続けるまたはもう少し上がるには、どういうのかな、自己規制というのか、自分を規制せなあかん思うんです。

M: 自己規制、ストイックでいることが必要なんですわね。

丸: 我々はそれとの戦い。結局。みんなの、何とかなるんちゃう? という僕以外のみんなは全員思ってる。周り・横にいるスタッフもお客さんも、下手すると関係者も思ってるわけ。せやけど、僕自身は自信もなければ、何の保証も自分の中ではない。いけるという保証が。今年についてもね。で、誰にどうというより、自分の中に弱いものがある。自分との闘いやね。結局は。人にどないせえあないせえ、言うてんねんけど、僕らも、よくよく考えてみると、自分やねん。自分がしっかりしたらええわけ。自己規制

やねん。自分との妥協をどこまで戦い抜くか。1月の演奏会にシンクロの井村さん来てくれて、本くれたんやけど、ぱっと表紙を開けたとこに「丸谷先生へ」って書いて、「敵は己の妥協にあり。」って書いてあったわ。誰かと競ってる間はね、しれてますわ。

M: あの井村コーチも丸谷先生と同じことを思っておられるんですね。

丸: せやけど、あの人の方が重みあるなあ。

M: 自分との闘いですね。我々弁護士も、見習うべき姿勢だと思います。

丸: 子どもらもそうやねん。メンバーもうちら200人くらいいてるから、そっから50人ほど選ぶ言うたら、まあ、ある種、競うわけですよ。それを周りと競ってると思ってる間はレベル低くて、自分との戦いに勝てるかどうかやね。今日はもう終わっておこうかいなあ思ったところで、もう1回やるとかな、そういうことができればいい。

M: 丸谷先生、改めてうちの事務所スタッフにも、聞かせていただきたいお言葉ですよ。そのほかに、指導上のコツとかは、ございますか?

丸: あとはね、演奏が面白いで!、楽しいで!、というところへ(気持ち)持って行ったらええわけやね。ところがやね、今度は、楽しさを教えるのが難しいわけや。楽しい言うたかて、わからへん。

M: 楽しいと思いなさい、と言っても、そうは思えないですもんね。

丸: そう。僕はねえ、いろいろやってきたんや、この50年間。たとえばええ演奏があれば、昔ならレコード渡したり、DVD やら CD 渡したり、これおもしろいぞって言うて。・・・でも、あかんねん。こんなおもしろいのんわからんか? て生徒に言うてもね、生徒らは「わからん」言いよんねん。ほんだら、ゲームはなんでおもしろいんや? 言うたら、誰かやってんのん見てて、やってみたら面白かったわけやねん。そうするとね、結局ね、(教える側の)自分が楽しまなしゃあないねん。自分が楽しむと、子供側から見たら、この人は何が面白ろうてやってんねんやろう? と、これ以外に手が無いねん。「やってみようかな」と思わせられたら、はまりこんでいくもんやねん。

M: なるほど。他人が楽しむ様子を見てやってみることで、楽しさを感じられることがありますよね。先生のお話から、自分との戦いに勝つ大切さと、他人と理想を共有するためのコツを知ることができたように思います。ありがとうございました。

